

オピオン

老人の「応分の負担」

中央区東支部 竹田文彦

平成12年度版の厚生白書では、ページの約半分を割いて高齢者問題が記述されている。この厚生白書の狙いが、「新しい高齢者像を求めて」と銘を打っているように、今までの厚生省が主張してきた高齢者像から180度転換しようと意図しているのは明白である。

「多様な高齢者」から「新しい高齢者像を求めて」に至る文面を貫いて結論づけているのは、「自立した高齢者が多様な生き方を選択する社会」つまり、「WHOの高齢化に関する6つの神話、すなわち、1. ほとんどの高齢者は先進国に住んでいる。2. 高齢者は皆同じである。3. 男性も女性も同じように年をとる。4. 高齢者は虚弱である。5. 高齢者は何も貢献できることはない。6. 高齢者は社会に対する経済的負担である。

以上の神話を打破することにより活力ある高齢化を実現しようと述べている。

「老人＝弱者」イメージを打破し、自立した活力ある社会的参加が求められるとし、「すべての世代が共に支え合う社会」を築く視点が欠かせないと結んでいる。

従来の「高齢者＝弱者」という見方から大きく方向転換したと言って良い。その転換せざるを得なくなった理由には、高齢社会の進展と少子化による社会的構造変化に伴う経済的負担の増大が第1に、第2に、核家族化に伴う家族関係の希薄化、加えて世代間の世代格差の進展による孤立化が挙げられるだろう。これらの要因がむしろ、高齢者をして自立を促し、最早「高齢者＝弱者」のイメージから「高齢者≠弱者」という論理に発展させていると考えられる。この論理の先に見える厚生労働省の狙いは、高齢者は平均的に豊かになっているのだから、「す

べての世代が共に支え合う社会」のために、「応分の負担」をしてもらうということにあるのは明白である。

白書は、「身体面では弱者」であるが、経済的には必ずしも弱者とは言えないと答えている統計データを根拠に「老人にも応分の負担」を求めてきたと言って良い。又、高齢者が本当に豊かになっているのかを調べることは決して簡単ではないと言いながら、厳密な研究もせずに老人の応分の負担を要求しているのは、あまりにも早計と言わざるを得ない。

産経新聞に、「老人に『応分の負担』とは…」という題と、『老後に備え貯めた金をとるむごさ』と副題を付けた論文があった。

著者は現在、ある研究所所長をしている学者である。彼が約50年前、大学の助手として働き始めた時、主任教授の勧めで老後のための貯金をしていたが、今はゼロ金利の時代で、年金だけでは食べてゆけない。友人や先輩の中には、これまで貯えてきたものを取り崩して暮らしている。にもかかわらず、政治家や官僚はこのいくばくかのストックに目をつけて「老人は弱者ではない。その証拠に老人は多額の預貯金を持っていると、悪代官のようなセリフを言う。私達は戦前、戦中そして戦後、無一物となった国家と国土をここまで復興させてきた。その原動力になったのはこれらの苦勞してきた我々老人であると主張する。

そして、更に「応分の負担」論は、ドラ息子が悪行のあげくにカネを浪費し、足りなくなったからといって親の財産をむしりとるという、いやしい魂胆に似ていると怒る。

この学者の言い分は、多くの老人の気持ちを代弁しているのは間違いないだろう。

まだ働けるが職を得るのは現在の経済的状況では至難の業である。老人の「低いライフチャンス」の存在が、老人を依然として弱者たらしめているのが現実であろう。

老人は、収入つまりフローではなく、ストックで生活せざるを得ない中、ストックの多寡により生活の豊かさの実感が異なる。統計によれば、ある程度豊かさを実感できる老人は老人の中では約3%と少ない。

一方で老人の自立を求め、他方で自立のチャンスを奪い、負担だけは応分にと要求するのは、やはり悪代官のセリフと言わざるを得ない。

日本の経済成長を支えてきた企業戦士の苦勞は、自分のため家族のためと言いながら、日本の国富の蓄積に多大な貢献をし、戦後のみじめな国柄を世界第2位の経済大国の成立に大いに寄与した事実は誰もが認めるところである筈だ。彼らが遮二無二はたらいてその当時の老人を養っていたわけであるし、大いに彼等老人の福祉に貢献していたのである。

厚生白書に欠ける視点は、世代に渡り連綿と働いて生活の糧としてきた国民の歴史に対する認識の欠如にある。他の白書と異なり、厚生白書には国民の生きがいにも関わる温かい人間の機微に配慮する姿勢が求められるのではないか。

社会の最少単位である家族のぬくもりが時代

とともに希薄化し、親は親、子は子といった冷たい空気が社会を覆い、個人主義あるいは人権主義が親子の関係にも楔を打つような冷たい潮流がひしひしと感じられるこの時代、厚生行政には血の通った視点で日本の将来像を語る姿勢を持って欲しいと望むところである。

厚生白書の言う「すべての世代が共に支え合う社会」、又「老人にも応分の負担」を望むならば、世代の連続性という歴史観を再確認する必要があるように思える。特に「家族」の意味を改めて問い直す作業が現代社会にこそ求められる。

私達は往々にして時代の主役である錯覚に陥るが、その存在も長き人間の歴史からみれば一瞬に過ぎない。人間のDNAラセンを切るが如き人間観、歴史観からは到底「共に支え合う」社会は望むべくもないことは確かである。

イギリスの評論家、ウィリアム・ハズレットは、「古書を読む」の中で、「前の時代を軽んずることは、後の時代にわれ自身のことを軽んずるように教えているようなものだ」と言っている。言い換えれば、「親を軽んずればわれ自身を軽んずること」に他ならない。

老人に「応分の負担」を求むることは、「ドラ息子の不始末の尻ぬぐいをせよ」と言うことであると認識すべきである。

(リバーサイド内科循環器科クリニック)

